

第23回

中学生作文コンクール

公益財団法人

ワンパーセント

イオン1%クラブ



受賞作品集

未来へつなぐ、 わたしのエコ活動



気候変動や海洋プラスチックごみ、森林破壊など、さまざまな環境問題が深刻化しています。

皆さんは、環境問題を実感することはありますか？

地球の未来を考え、あなたが取り組んでいることや、これから取り組みたいことを作文にしてください。

【主催】 公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

【後援】 文部科学省 環境省 朝日新聞社 朝日中高生新聞

目次

P2	目次	
P3	私たちの、たった一つの地球 雨垂れ石を穿つ	池田 健心 原澤 幸希
P4	海のゆりかご大作戦 優しさを編み直す	藤田 崇弘 太田 綾音
P5	見えないエコ、見つけた！ ヤギとSDGs	小林 巴菜 榊原 托純
P6	『さらば、ビニール傘袋』 小さな循環型社会	弘松 詩菜 北郷 優斗
P7	今の私にできること 捨てる油で空を飛ばそう！	松浦 里緒 山田 愛華
P8	時をつなげる物差し 温故知新でエコ活動	稲垣 奈名子 後川 優紀
P9	「いただきますの、その先へ」 自販機大国日本から給水スポット大国日本へ	宇都 千遥 小野 凜花
P10	静かに森が呼んでいる 自然と未来をつなぐエコ名刺	小野寺 奏和 小原 莉緒
P11	「赤」を知らないトマトたち 想像力を持った行動で未来の地球を守ろう	竹内 あかり 竹鼻 麻実
P12	遠くのペットボトルのこだま いつまでも続け！青空広がる野球観戦	陳 国荣 土井 こころ
P13	未来へつなぐ自転車通学 未来の手賀沼のために、今出来ること	富久 眞斗 長野 遥貴
P14	おばあの口ぐせ 全ての生き物へ、届け！私の植林計画	仲村渠 愛結 西垣 美緒
P15	未来へつなぐ金継ぎ この町に息づく「ていねいな暮らし」	服部 華乃 坂東 可奈子
P16	衣類の環境問題と受け継がれる服 ゴミの海からの挑戦	藤 彩乃 山内 南都子
P17	私たちの暮らしの中で 空に出て地に落ちた蝶	山口 庭來 横田 梨緒

私たちの、たった一つの地球

福岡県 直方市立直方第二中学校 二年

池田 健心

「地球は、たった一つしかないんだよ。」

ある先生との出会いが、私を変えてくれた。

先生との出会いは、私が小学四年生のときだった。先生は、始業式の日、先生として働くのは初めてだと教えてくれた。それと同時に、先生になる前は、世界のいろいろな国に行つて、ボランティア活動をしていたということも教えてくれた。私は衝撃だった。それまで海外との接点なんて、外国語活動のA.L.T.の先生との授業ぐらいいしかなかった私は、世界の国々を知っている人がこんな身近にいるということ、そんな人が自分の担任の先生になるということに驚きを隠せなかった。なんだか急に、私の中の世界との扉が開いたような気がした。

四年生の学習が始まると、先生は毎日のように、世界の国々のことを話してくれた。言語や文化、スポーツ。どれも興味深いものばかりだった。その中でも、特に心に残ったのが、戦争や平和、環境問題についての話だった。今、地球では、ごみ問題や温暖化の問題、海洋汚染、森林破壊、さまざまな問題が起きていること、そして、その問題が深刻化すれば、将来地球はなくなってしまうことを、写真や資料をもとに、先生は私たちに語ってくれた。

私はそれから、自分にできる行動は何かを調べ、まずはごみの分別や、3Rを実践してみた。家族にも呼びかけ、直方市役所が主催している『環境カレンダー』に取り組み、節水や節電をし、記録をつけて振り返った。高学年に進級すると、地域の清掃活動に参加したり、現在の環境問題のこのについてより深く知りたいと思い、SSH指定校の高校を訪ねて、環境問題に詳しい高校生に話を聞いた。より多くの人に現状を知ってもらうため、学んだことを自主学習ノートにまとめて、クラスの人々に読んでもらったりした。

私は今、中学二年生になった。現在も、自分にできる取り組みを続けながら、SSH指定校への進学を目標に、勉強と部活を両立する日々だ。高校では、特に関心のある、海洋プラスチックの問題についての解決方法を深求していき

いと考えている。海は、世界の国々とながっている。海の問題について考えることは、地球をまるごと大切にすることになると私は思う。

先日、久々に母校の小学校を訪ねた。担任だったあの先生は、今はアフリカ南部にあるボツワナという国で先生をしているそうだ。先生が教えてくれたことは、私の人生を変えるきっかけになった。私の小さな行動でも、きつと地球の未来を変えていくと信じている。生物を思いやる心を持つことができれば、みんなが幸せで、平和な地球をつくることにもつながると思う。私は行動を続けたい。たった一つの地球を守っていくために。

雨垂れ石を穿つ

神奈川県 鎌倉市立手広中学校 三年

原澤 幸希

私は人前に立つ事が苦手だ。皆をまとめ、巻き込める力はない。でもこのまま何もしないのは嫌だ。ならば一人でも動き出せば良い。

小学三年生の時にダボス会議を見てプラスチックごみ問題を知り、何の疑問も持たずに使つて捨てていた物が地球を壊していたなんてと衝撃だった。私にも何かできないかと翌日から給食のストロー不使用を決め、先生に許可を得て直接飲む事にした。最初は恥ずかしくて自分の長い髪で隠していた。そんなの意味がない、汚いと言われ泣いて帰った日もあったがやめたくなかった。この問題を図書室で調べ、大学教授や研究者のセミナーに参加しノートにまとめた。海洋ゴミの八割は陸上からと知り、登下校中にごみ拾いを始めた。

でもこれでは何も変わらないと勇気を出し活動家の方に相談した。緊張していたが、ノートを見せた事で思いが伝わりSNSで私の活動を紹介して下さった。こうして学校と家だけの世界から大きな世界へ広がっていく。

「自分の目で確かめてこ

ろ」と言われ、ヨットで東京湾マイクロプラスチック調査に行つた。顕微鏡で多くのマイクロプラスチックの間を泳ぐプランクトンが見えた。これを食べたら食物連鎖に影響が出る。怖くなった。これは本の中の話ではなく現実なのだ、教科書では伝わらないこの現状を私が伝えなければと、ポスターを作り学校に掲示した。レポートがSDGs作品大賞で大賞を受賞し、黒岩知事や県の首長の方々に活動を知って頂けた。これを機に講演会で発表する事になった。

人前で話す事が苦手な私には大きな挑戦だが、思いを伝えたくて何度も練習した。給食のストロー変更には大人の力が必要で、力を貸して下さい。その言葉が次に繋がると、国際環境会議や多くのメディアで発表する機会を頂いた。そして活動を知った鎌倉市が動いて下さり、私の学校でプラスチックを分解する実験を行う事になった。その後遂にプラスチックを分解する新種の微生物が発見され、更に鎌倉市の公立小中学校でプラスチックストローを廃止し、100%生分解性ストローへの変更

が決まった。想像も出来なかった結末だった。そしてこの夏、環境大臣との面会を果たした私を、あの頃は想像出来ただろうか？

たった一本のストローを使わないという小さな事から始まった。でもその強い思いは必ず誰かに届き、社会を変えられると実感した。実際始めた時は何かしなければという衝動で、動機なんて後付けだ。ただ楽しく活動が続いていた。初めから大きな理想を描く計画的行動は効率が良い。でも実際は計画通りいかない事の方が多く、理想への道のりの長さに挫折する人もいるだろう。私はゴールもわからずただ我武者羅で、効率は悪かったかもしれないが何があっても「やめない、続ける」と小さい事を重ね、少しずつ自分のできる事の幅を広げた。小さな事でも続けられれば変化を起せるのだと、皆に知ってもらいたい。これが今の私の目標だ。

海のゆりかご大作戦

広島県 英数学館中学校 三年

藤田 崇弘

今、私の住む瀬戸内海で何が起きているのか。私は知らなければならぬ。そして行動しなければならぬ。

家族で潮干狩りに行った思

い出は楽しくも苦しい思い出

になった。なぜなら一つもアサリが取れなかったからだ。昔は採れていたのに何故採れなくなったのか。インターネットで調べてみた。すると地球温暖化が原因だということ

が分かった。地球温暖化で水温が上がっていることは耳にするが、水温が上がることで何が起きているのか。海の生態系との関係が分からず、私はモヤモヤした気持ちを抱えていた。

そんな時、地元の漁業組合の方と海環境について考えるイベントに参加する機会を得た。そこで、海藻が急速に消えていることを知った。水温上昇で藻が育たない、もしくはゴミが原因だろうと疑った。しかし違った。

「食害だ。今、食害が起きている。今すぐ行動しなければならぬ。」

漁師のおじさんの叫びともいえる言葉だった。私は背筋がぴんと伸びた。水温が高い海

域に生息するアイゴという魚が瀬戸内海で大繁殖している。アイゴは藻を好んで食べ尽くし、海藻が消えたことで食物連鎖が崩れ、魚もアサリも減ってしまったのだ。

私はこの事実を知り、魚の住処や産卵場所となる「海のゆりかご」と呼ばれるアマモを育てる活動に参加した。まず、海環境を知るため、地引網を行った。期待は裏切られ、網にかかったのは大量のゴミ

だった。怒りと落胆でやる気を失いかけていたが、目の前に広がる深い青の海を見たら力が湧いた。そして浜辺の清掃活動から始め、いよいよアマモの養殖に取りかかった。

漁業組合の人が船で雨の中、アマモを採りに沖合へと船を出してくれた。そして二

ヶ月間、玉ねぎネットに入れて海水につける。引き揚げたアマモの種子をピンセットで選別する。その作業は気が遠

くなるほど根気が必要だった。さらに二ヶ月低温で熟成させる。最終段階は種子を堆肥入りの土に混ぜ込む。その

土で、なんとアマモの種子入り泥団子を作るのだ。できたアマモ泥団子をガーゼに包

み、弁当箱が入るくらいの大

きさの竹籠に入れて、海に沈める。播種をみんなで願った。

半年後、漁業組合の方が海中写真を見せてくれた。根を張り、黄緑色に揺れる海のゆりかごの姿に生命力を感じた。愛おしかった。私は紙粘土団子で失敗したことや、悪天候で全部流されてしまった無力感や苦労も全部報われた気がした。

知ること、行動することをアマモを通じて学んだ。漁業組合の方や地域の方と一緒に海を守ろうと行動できたことは、大きな自信となった。

未来へつなぐ命の海。その青い海の底に、緑に輝くゆりかごを育てていかなければならない。輝きを絶やさぬよう、仲間との作戦会議は続く。

アクリルたわしは環境に優しい。私はそう信じていた。アクリル毛糸を編んで作ったエコたわしは、細かい繊維が油をよく吸着し、洗剤をあまり使わずに済む。母も環境を思い心を込めて編んでいたし、私もそれを誇らしく感じていた。

しかしある日、環境問題の記事を読んでいたとき、目に飛び込んできた一文によって、その信念が大きく揺らいだ。「アクリルたわしはマイクロプラスチックの原因になる」

頭の中に冷水を浴びせられたようだった。石油でできているアクリル毛糸は、洗うたびに繊維が抜け、排水に流れ出してしまふ。それがやがて海へ届き、魚や鳥、そして人間の体にまで入り込む。信じていた「エコ」は、実は環境を傷つける存在だったのか。母も私も、言葉失った。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。私たちは気を取り直して、別の糸で作ってみることにした。綿、ウール、麻。自然素材の糸でたわしを編み、油を塗った皿を水だけを使ってこすり、汚れの落ち

具合や使い心地、耐久性を比べた。すると、綿で作られたものが、総合的に見て最も優れていることがわかった。

実験を終えた私は、綿のエコたわしを皆にも使って欲しいと思った。各家庭の毎日の小さな変化が、地球の未来を少しでも守ることができるとも思えないからだ。では、どうすれば綿のエコたわしを、日々の暮らしに浸透させることができるか。

まず、学校生活にエコたわし作りを取り入れてはどうだろう。例えば家庭科の授業で、私たちが行ったような実験を試みる。ただ作るだけでなく、「なぜアクリルでなく綿を使うのか」を学べば、環境問題と自分の生活との結びつきを実感できるはずだ。

地域へ広げられると尚良い。授業で作ったたわしを文化祭や地域のバザーで販売したり、ワークショップで世代を超えて一緒に作ったりする。そして売上の一部を環境保護団体に寄付すれば、学びが社会への貢献にもなる。こうした活動を通して、綿のエコたわしが、自然と家庭にも受け入れられていくと理想的では

ないか。

今回の出来事を通して私は、「正しいと思っていたことが、実は間違っていたことがある」と改めて実感した。そして、間違いに気づいたときに立ち止まってしまうのではなく、「すぐに方向を修正すること」が大切だと学んだ。アクリルたわしをやめ、新たに綿で編み直したように、今できる最善を考え、行動することが大事なのだ。

環境対策の評価は時とともに変わる。だからこそ、その都度確認し、より良い選択を重ねる必要がある。「未来につながるエコ」を探す新たな一歩を踏み出すことをやめなければ、地球に優しい社会が、きっと待っているに違いない。

優秀賞

優しさを編み直す

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校 二年

太田 綾音

見えないエコ、見つけた！

広島県 広島市立国泰寺中学校 三年

小林 巴菜

先日、私が携帯を見ていると、母が

「データを消すだけでエコに繋がるって知ってた？」と言いました。私は携帯の使い

すぎが目には悪や、依存しすぎはよくないという話は聞いたことがありましたが、保存し

ている写真や動画のデータが環境に関係しているというのを初めて知ってとても驚きました。私は気になって調べて

みました。

スマホやパソコンに保存されたデータは、多くの場合クラウドと呼ばれる場所に保管されていて、そこでは大量の電気を使って情報を処理しているそうです。その仕組みを支えているのが、世界各地にある「データセンター」と呼ばれる大規模な施設です。そこではコンピュータが二十四時間動いていて、冷却のための空調設備もずっと稼働しています。これらすべてに使われる電力の多くは、火力発電などの方法で作られていて、大量の二酸化炭素を排出しています。私たちが、携帯の中に何気なく保存している大量の写真や動画が、実は地球温暖化の一因になっているというこ

とを知りました。環境問題はもっと遠い世界だと思っていたのに、携帯の中から、関係しているなんて、まったく想像していませんでした。

それをきっかけに私たちが家族は夏休みの自由時間を使って消した写真の枚数を競う「消しエコ選手権」をしました。家族みんなで必要のない動画を整理したり、とても盛り上がりを見せました。消しエコ選手権をすることで私たちの携帯の保存容量がかなり減り、携帯の動作が少し軽くなったような気がして、ちよつとうれしくなりました。エコ選手権を終えると、母は

「小さなことでも積み重ねれば地球に優しい行動になるね。」

と言いました。その言葉に私は胸を打たれ、友達にも広めてみようという気になりました。友達は最初はピンときていない様子でしたが、理由を説明すると

「それって結構大事なことなんだね、私もやってみる、スマホも軽くなるし地球にもいいなんて、すごくいいじゃん。」と納得して笑ってくれて、私も思わず笑みがこぼれました。

この出来事を通じて、環境に優しい行動は特別なことではなく、身近な暮らしの中からも始められるのだと気づきました。家族から友達へと繋げていくエコの連鎖で環境と大切な人を守り、みんなが笑顔になるような世界になってほしいです。これからも、自分にできる小さなことを少しずつ続けて、誰かに伝え、良い連鎖を広げていきたいと思えます。一人一人ができる簡単なことをみんなで始めて見えないエコをしたいです。

ヤギとSDGs

愛知県 名古屋市立大曾根中学校 三年

榊原 托純

「ヤギと一緒に中学校の清掃奉仕活動を実施し、SDGsを実現します。」これが僕の生徒会執行委員に立候補したときの公約だ。この選挙公約を思いついた時は、単に選挙で当選したいという一心だった。そして僕は当選した。

当選してから、僕はヤギ除草のことをもつと知りたいと思い、調べてみた。通常は除草する場合、除草剤をまくか、草刈り機で草を刈り、刈り取った草を焼却するかのどちらかだ。しかし、除草剤は環境汚染につながってしまう。草刈り機は燃料が必要で、草を燃やす際に大量のCO₂が発生してしまう。だが、ヤギ除草は、草をやぎが根から食べてくれるので環境にやさしい。高齢化で除草ができていない田舎では、近年熊が出没し襲われる事件が多発している。草を刈り取っておけば害獣が発見しやすくなるため、ヤギ除草のメリットは大きい。実際に

大学でヤギを飼育し、校内を除草してもらうヤギ部という部活も存在すると新聞記事に掲載されていて、興味深いと思った。

僕は、学校のみんなにもヤギ除草の素晴らしさを伝え、SDGsへの関心を深めてもらうために選挙の公約を実現したいと思った。しかしながら、いざヤギに学校へ来てもらおうと考えると、多額の費用が大きな壁となった。解決策が見つからないまま、どんどん時間だけが過ぎていった。そんなある日、名古屋市内でヤギと交通安全運動を実施したという記事が新聞に掲載されているのを見つけた。名古屋市内でヤギを飼育している土木会社がある。毎年協力して開催しているらしい。これはチャンスだと思い、その企業のHPに協力してもらえないかとメッセージを送ってみた。しばらく返事がなかったのですが、やはり無理だったかとあきらめそうになった時、学校の先生からその企業が協力してくれると連絡をうけたことを伝えられた。僕はとてもうれしかった。

そして雨による一度の延期を経て、待ちに待ったクリーンキャンペーン当日を、僕は生徒会長として迎えることができた。いつもの学校にヤギが来て、草を食べてくれている

光景に、僕は感動した。学校のみんなとヤギに癒されながら環境について考えるこの素晴らしい一日を僕はずっと忘れないだろう。

猛暑や大雨による洪水等、最近の異常気象には恐ろしさすら感じる。この二、三年でも異常な暑さはどんどん増してきている。僕たち一人一人がもつと環境問題に関心を持ち、自分たちのできることから取り組み始めることが大切ではないだろうか。ヤギ除草がきっかけで、学校のみんなもSDGsに関心を持つてくれたら嬉しい。僕には将来、ロボットクリエイターになるという夢がある。自然環境を守り、異常気象を食い止めることができるようなロボットを作り、世界を守るような人に僕はなっていきたい。

5

『さらば、ビニール傘袋』

愛媛県 愛媛大学教育学部附属中学校 二年

弘松 詩菜

みなさんの家にエコバックはいくつありますか？今は買っている人が多いと思いますが、これはどの程度エコに繋がっているのでしょうか。

我が家の場合、以前は買い物の際にレジ袋をもらって、荷物を袋から出したあとは生ごみを入れる袋として第二の役割がありました。今はエコバックを使うので、生ごみのために袋を購入している。母の周りでも大きなゴミ箱に捨てる前に一旦レジ袋サイズの袋にゴミをまとめるので購入している人が多いそう。第二の役割があるレジ袋。それと比べて傘袋ってエコじゃないと思う。私は常々雨の日に商業施設の入口で散らばる傘袋を見てモヤッとしていた。濡れた傘から落ちる水滴で床は滑りやすくなるし、汚れる。衣類にも水が付く。だから傘袋は必要である。たしかにそうだが薄い傘袋はうまくはがれず一枚とるつもりが二枚三枚くっついてきて、いらぬ分は横のゴミ入れに捨てる。ちゃんと一枚とっても傘の先が突き出て穴があき、またもう一枚使う。一枚だけ利用した場

合も使用後はなんの利用もできないのでその場で捨てて帰る。これをなんとかできないかと考えていた。

私は愛媛大学のジュニアドクターに参加している。私の研究テーマは傘の水滴を落とす道具についてだ。すでにマイクローファイバーで両側から挟む（スポンプレス機のような）装置を販売している会社もあるのだが導入している施設は少ない。傘袋よりエコなのに普及していない理由として、メンテナンスが必要という設置側の意見と布との摩擦で傘が傷みそうという使用者側の意見があることがわかった。

私は研究において、まずは使用者側の意見を優先することにした。摩擦で傘の生地や骨が傷まないものを考えた時に、空気を活用して水分を飛ばす麺の自動湯切り機を参考にしながら、メンテナンスや維持費の問題もある。そこで、電動ではなく人力でできる物を作り出せたらと考えた。昔の足踏み脱穀機をイメージして一年目の研究で試作品を作ったがエアがうまく出ず水滴を飛ばすのとはほど遠い出来であった。二年目の今年も試行錯誤

を繰り返しているがまだまだである。

私の研究が傘袋の無駄をなくす将来に繋がる可能性は低いかもれない。だが、普段の生活の中でモヤッとしたことを流さずに自分の中で突き詰めて考えることもエコ活動の一つではないだろうか。

海岸のゴミ拾い、リサイクル活動、省エネなどすぐにできることをコツコツ続けることもとても大事だ。それに加えて皆が「これってエコじゃないよね」と思ったことを「じゃあ、どうしたらいい？」と一人ひとりが考えることもとても大事なエコ活動だと私は考える。

小さな循環型社会

宮崎県 都城市立姫城中学校 三年

北郷 優斗

宮崎県に移住してから、私の暮らしにはいつも「ニワトリ」と「畑」があった。このプロジェクトは、決して他の誰かが言い出したことでも、親の手伝いでもなく、小学三年生の頃から私が黙々と続けてきたものだ。多くの人が環境問題は「大きなもの」だと語るが、私は毎日ニワトリと土と向き合う中で、気候変動やゴミ問題といった深刻な課題を、とても身近なものだと感じている。きっかけは、小学二年生のときに学校で育てたミニトマトの味が忘れられず、「自分で食べる野菜を自分で育てたい」という単純な思いだった。

移り住んだ曾祖父の家で、私は、家の土を活かした野菜づくりをしようと決めた。何度も失敗を繰り返すうちに、この土地で採れた野菜から自家採種したタネは、驚くほど元気に育つことを発見した。畑の栄養は、台所の生ゴミを活用したコンポストと、三年前に飼い始めたニワトリの糞尿から作る堆肥でまかなう。こうして、私の畑では小さな命と土が互いに助け合う「循環」が静かに回っている。

ニワトリは、私の環境活動

を大きく広げてくれた存在だ。ニワトリを飼い始めた当初、害獣に襲われる悲しい出来事があった。その悔しさから、私はニワトリを徹底的に守るため、廃材を使って試行錯誤を繰り返した。その中で、ニワトリの「雑草を食べ、土を掘り返す」という習性を活かして、底のない移動式の鶏小屋、通称「チキントラクター」を開発した。このチキントラクターを畑に置くようになると、私は都城が抱える意外な環境問題に気付いた。ゴミ捨て場に山積みになった、大量の雑草ゴミだ。また、地域全体の高齢化が進み、雑草の処理に困っている人も多い。この現状を目の当たりにし、「私のチキントラクターが、この地域の課題を解決できるかもしれない」と考えるようになった。

そこで私は、チキントラクターを地域の空き地などに貸し出すことを始めた。最初は「こんな狭いところにニワトリを入れてかわいそう」という声も耳にした。その指摘を受け、私はすぐにニワトリが快適に過ごせる広さを調べ、運搬しやすい組み立て式に改良することで、この問題にも

向き合った。JR西都城駅前に設置した際には、通りすがりの人が、ただ静かに雑草がなくなっていく様子を眺めているのが見えた。

私のプロジェクトは、小学三年生の頃にたった一人で始めた小さなものだった。しかし、ニワトリとの出会いをきっかけに、家庭内の循環から地域の課題解決へと活動が広がる。私自身の環境問題に関する視点も深まった。最初は、周りの同級生との興味とはかけ離れていたが、少しずつ感心を持ってくれるようになった。私の小さな循環型社会は、地球の未来と地域の未来が密接につながっていることを教えてくれている。私はこれからも、自分ならではの視点で、環境問題と向き合っていく。

優秀賞

今の私にできること

福島県 いわき市立泉中学校 三年

松浦 里緒

私は海が大好きです。小学生の頃からサーフィンという競技に熱中しています。

ある日の放課後、私は地元である、いわきの海で大会に向けて練習していました。浜辺のひんやりとした冷たい砂、しぶきを上げて崩れていく波の音、海面にぼんやりと映し出される夕日、全てが私を優しく包み込んでくれました。波に乗っていると、突然大きな何かにぶつかってしまいました。見てみると、台風によって流れ込んできた大きなゴミが浮いていました。奇跡的に大怪我をせずにすんだものの、私の大切なサーフボードに大きな穴が空いてしまいました。私はそれを見て、とても悔しくて、涙が出ました。それと同時に、この状況を深刻に感じ、今海で何が起こっているのか、興味を持ちました。

本やインターネットで調べてみた結果、「これらのゴミは全て人間によるもので、海を汚し、また、海に住む生き物たちを傷つけ、苦しめている。特に一番多いプラスチックは、長い時間をかけて分解されるため、二〇五〇年には海に住む生き物の重さより、海洋プラ

スチックの方が重くなる。そして、これらのゴミは、最終的には細かくなり、私たち人間の体内に取り込まれる。」という事が分かりました。私はこの事実を知り、今のままでは、自然と調和した生活が送れなくなるかもしれない、と思いました。また、海自身が叫ぶことはできないけれど、私たちがその声を代わりに届けることはできるのではないかと感じました。

今、私は地元で、同じ趣味をもつ仲間と共にビーチクリーンに取り組んでいます。ビーチクリーンをする事で、砂浜にあるゴミを少しでも減らす事ができ、そのゴミが海に流れていくのを防ぐ事につながります。他にも、ゴミの分別をしたり、ペットボトルや食品トレイはリサイクルに出したり、エコバックを持ち歩いたりするなど、私たちにできることは、考えてみると沢山あります。

私は、ビーチクリーンをしている時、落ちているゴミが多すぎて、「本当に自分は力になっているのか？」と思うことが時々ありました。自分の今の力では何ともできない歯

優秀賞

捨てる油で空を飛ばう！

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校 二年

山田 愛華

今年に入って「SAF」という言葉をテレビCMで見聞きすることが多くなった。SAFとはSustainable Aviation Fuelの略称で、持続可能な航空燃料の意味である。家庭用の使用済み油を回収し、航空機の燃料として利用することでCO₂排出量を削減するという取り組みだ。我が家では昨夏SAFのプロジェクトの存在を知り、取り入れ始めた。

このプロジェクトは「Fly to Fly Project」として、石油エンジンアライアンスが東京都と航空会社と手を結び、二〇二四年三月に開始した。当初は、家庭用油の回収が始まって間もなかったこともあり、認知度も低かった。

「家庭用油で飛行機なんて飛ばせるの？」

去年の私は半信半疑のまま、食事の準備で出た油を集め始めた。当然だが、回収する油は不純物のないものに限られるため、一度の使用量の半分くらいしか残らないこともあった。回収の作業に不慣れだったこともあり、結果的に

去年一年間で四リットルしか集めることができなかった。そこで今年は、一年間で八リットルを目標にした。倍の数字に設定した理由は、家族全員の意識も高まって作業にも慣れてきたこと、それに加え回収場所が大幅に増えたことが大きい。去年まで最寄りの回収場所は横浜市と遠く、気軽に運びに行けなかった。それが、今年五月から都内に設置場所が一気に増えたことでより身近に利用できるようになった。東京都が主催する回収キャンペーンやPRイベントが行われたことが回収場所増加につながった。実際に都内の回収場所に行くと、去年は誰もいなかったBOXの周りに、今年は興味深そうに覗き込む家族連れの姿が増えていた。現時点で既に三リットルを回収場所に運んだので、順調にいけば目標は大きくクリアできそうである。こうした行動で、日常生活の中で自然にエコ活動ができるようになってきたと感じている。

この夏休みに、旅行で羽田空港を利用する機会があった。空港で読んだ航空会社のパンフレットに「Fly to

Fly Project」についての記事を見つけて心が弾んだ。記事の内容は、回収した油を大阪府の製油所で国産SAFとして量産し、ついに二〇二五年七月、羽田空港の定期便に配給が開始されたというものだった。まだまだ実用的に運用されるのは先になるそうだが、着実に、確実に、自分のエコ活動が未来に繋がっていることが実感できたことが嬉しかった。「みんなで飛行機を飛ばそう！」今は本気でそう思っている。将来、このプロジェクトで飛ぶ飛行機に乗って旅行するのが、昨年から密やかで大きな夢だ。それは十年後？二十年後？どんな社会になっているのだろうか。今からとても楽しみである。

入賞

時をつなげる物差し

東京都 学校法人北豊島学園 北豊島中学校 一年

稲垣 奈名子

今年の夏、私は栃木県と福島県を旅行した。一才の頃に亡くなった曾祖母を知りたかったからだ。曾祖母は母によくこう話したそうだ。

「何でも昔に帰ればいい。」

曾祖母は物を大事に使い続けた人だったと聞いている。私の家には曾祖母、祖母、母、私へと受け継いできた竹製の物差しがある。

そこで私は最初の目的地を栃木県にある竹林豊場に決めた。父の運転する車が農場に近づくとも竹林が見えてきた。車を降りて砂利道を少し歩くと高さ十メートル以上ある竹たちが緑色のトンネルを作り始めた。見上げると竹たちの先端の間から青空が見え、葉は日光に当たり濃淡を作り出していた。私は目の前の光景にただただ圧倒された。

そして農場の中にあつた竹の資料館に入った。展示されている竹製品の説明によると、竹は幹の中が空洞で軽く丈夫で加工しやすいことが特徴のようだ。農業、漁業、生活用品また食材にもなる。とても成長が早く子孫を増やしていく竹ほど持続可能な植物は他にはないことが見直されて

いると書かれていた。これを知り、道具にも食料にもなる竹はプラスチック製品に頼らない未来を作ろうとしている私たちにとって不可欠な植物だと思った。竹は丈夫だからこそ曾祖母から私まで物差しを受け継ぐことができた。

そして私たちは福島県へ向かい、明治時代から続く会津木綿の織元を訪ねた。曾祖母は六十歳まで秋田の織物工場で働いていたのを見てみたかった。店の前に立つとガシヤンガシヤンと織機の音が聞こえてきた。店で生地を購入したあと工場を見学させてもらった。工場内は扇風機が回っていたがとても暑かった。たくさん自動織機の音は隣にいた母の音が聞こえないほど大きく力強さと迫力を感じた。会津木綿は江戸時代から着られていて竹は手桶や釣竿と古くから使われていた。そこで図書館で昔の物と人の暮らしについて調べてみた。江戸の人々は物を修理しながら長く使い続けることが普通だった。そのため傘の紙の張り替え屋や割れた瀬戸物を直す焼きつき屋など様々な物を修理する職人たちが町中を歩いている

た。また、子供たちが通っていた「手習い」の教科書は百年以上使われたものもあった。江戸の人々は物を大切に長く使うことを心がけていた。私たちも今ある資源を有効活用するためにまずできることから始めるべきだ。

したがって私は捨てずに物を長く使い続けることを日本文化の一つだと考えた。この精神は江戸の人々から曾祖母、そして私たちへと受け継いできた。私は今回の旅行で曾祖母の話し「昔に帰ればいい」の意味を知った。全てを昔に戻すことはできないが、身の回りの物一つでいいので使い捨てをやめてみるべきだ。大量生産は資源やエネルギーを消費し地球温暖化を加速させる。私たち世代に受け継がれたこの文化を絶やさず、次の世代その先までもつなげて地球の環境を守るべきだ。

入賞

温故知新でエコ活動

福岡県 福岡市立高取中学校 二年

後川 優紀

私の祖母は、生活の中で様々なエコ活動を行っている。私がその事に気がついたのは小学生の頃だ。台所で洗い物をしている祖母が、野菜の皮などの生ゴミを袋に集めていた事を不思議に思い、それをどうするのかと聞いた。祖母は、「専用の機械に入れて、庭の植物の肥料にする。」と教えてくれた。この話を聞いてから、私は祖母の行っているエコ活動に注目し、探してみることにした。

このように、一言で「エコ活動」と言ってもその種類は多岐に渡る。そして暮らしの中ですでに多く取り込んでいくのは、昔ながらの「節約精神」をもっている人なのだと思う。この精神があるからものを大切にし、自然に寄り添った生活ができるのだろう。

かつて江戸の人々の生活が「循環型社会」であった事はよく知られている。例えば今でも行われている古紙・古着回収にはじまり古傘・古樽・蠟燭・髪の毛など驚くものまで集めて再利用されていた。また修理業も活発で今であれば捨ててしまうような割れた食器や鍋の修理など、直せるものはなんでも直して使うという精神が活発だった。いわゆるリユース・リサイクルが当たり前に行われていたということだ。これに比べ、現代人は物に溢れた生活を手に入れたことで、「節約精神」を忘れてしまったように思える。その積み重ねが、資源の浪費や環境破壊を引き起こしているともいえるだろう。

祖母の暮らしぶりを見れば、いかに私達が物を粗雑に扱っているかがよくわかる。フ

アストファッションに見られるように、「捨てて買う」というサイクルが当たり前になり、物や自然の大切さに気付く事が難しくなってしまう。今こそ、エコな営みに目を向けるべきではないか。祖母が当たり前のように行っていたエコ活動を私が受け継ぐ事で、よりよい未来をつくる一歩になるのではないか。故きを温め新しきを知る、まさに「温故知新でエコ活動」である。

入賞

「いただきますの、その先へ」

鹿児島県 薩摩川内市立東郷学園義務教育学校 三年

宇都 千遥

「米は命の源だ。」祖父がよく口にするこの言葉は、私の心に深く残っている。私は、祖母、従姉家族、そして家族と一緒に米づくりをしている。田植え、草取り、稲刈り。季節ごとに田んぼは表情を変え、私たちは自然と向きあいながら米を育てている。

夕方のニュースで、雨がほとんど降らず、田んぼの土はひび割れ、稲はぐったりしている映像が流れてきた。祖父は、

「水がないと、命も育たない」

とつぶやいた。その言葉に、私はハッとした。米づくりは、自然との共同作業だ。気候が変われば、収穫量も変わる。最近のニュースでは、米不足や価格の高騰が話題になっていたけれど、私たちの田んぼでも、それは現実には迫っていた。

そんな経験を通して、私は「エコ活動」は特別なことではなく、日々の暮らしの中にあることだと気づいた。例えば、水の使い方。田んぼに水を引くとき、無駄に流さないように工夫する。農薬も必要最低限にして、カエルやトンボが安心して暮らせる環境を守る。

田んぼの生き物たちは、私の小さな仲間だ。彼らが元気なら、田んぼも元気になる。だから私たちの家族は、自然に優しい米づくりを意識している。

また、食べ物のありがたさも実感するようになった。自分で育てた米を食べると、「いただきます」の意味が変わる。店で買うお米や給食で出されるお米や野菜も、見えない誰かが汗を流して育てたものだと思うと、残さず食べようという気持ちになる。これも、私のエコ活動のひとつだ。

田んぼ仕事は、正直言って嫌いだ。暑いし、腰が痛くなり、刈り取った稲を運ぶと腕がチクチクする。でも、今の年齢になり、自然と向きあう時間は、私にとってかけがえのないものだ。気づいた。空の色、風の匂い、土の感触。田んぼは、私に自然の大切さを教えてくれる。

最近では、友達に「農業って大変そう」と言われることもある。でも私は胸を張って「大変だけど、やりがいがあるよ」と答える。自然と向きあうことで、命のつながりや地球の

未来を考えるようになった。田んぼは、私の先生でもあるのだ。

さらに、米づくりを通して、家族との絆も深まったと感じている。田植えのとき、泥だらけになりながら笑い合ったこと。稲刈りの後にみんなで食べたおにぎりの味。自然の中で過ごす時間は、家族の思い出をつくる時間でもある。そんな日々が、私の心を豊かにしてくれる。

私は、これからも家族で米づくりを続けたい。そして、未来の子どもたちにも、この田んぼの声や私たちの思いを届けたい。小さな田んぼから始まった私のエコ活動が、未来へつながっていくことを信じている。

私は、これからも家族で米づくりを続けたい。そして、未来の子どもたちにも、この田んぼの声や私たちの思いを届けたい。小さな田んぼから始まった私のエコ活動が、未来へつながっていくことを信じている。

入賞

自販機大国日本から 給水スポット大国日本へ

広島県 広島市立広島中等教育学校 二年

小野 凜花

日本は「自販機大国」と呼ばれるほど、自動販売機が多い国だ。街中、駅、学校、公園など、どこにでも自販機があり、いつでも気軽に飲み物が買える。その便利さは確かに魅力だが、その一方で見過ごせない問題もある。それは、大量のペットボトルだ。買ってすぐ飲める反面、使い捨ての容器が増え、環境への負担が大きくなっている。

私が住む広島市では、「給水スポット」というものを最近見かけるようになった。マイボトルを持っていけば、無料で水を補給できるサービスだ。これは、ペットボトルの消費を減らし、プラスチックごみを減らす取り組みの一つである。例えば、観光地では観光客にマイボトルの持参を呼びかけたり、給水マップを配布したりしている地域もある。

さらに、企業や自治体が連携して、駅や商業施設の中に給水機を設置する所も増えてきた。これは、「買う水」から「汲む水」への意識の変化を示しているように感じる。

このような動きは、便利さと環境保護のバランスを考える良いきっかけになる。日本

人はもともと綺麗な水に恵まれており、水道水も安心して飲める国だ。その強みを生かして、もっと多くの人が「マイボトルを持ち歩くのが当たり前」と思える社会に変わっていったら良いと思う。

私の学校には、自販機と給水機があり、私はいつも給水機でマイボトルの補給をしている。私以外の多くの生徒もマイボトルを持参している。

このような意識の積み重ねが大切なのだと実感する。もちろん、給水機ではなく、自販機を利用する人もいる。だが、自販機を全て無くすことは不可能である。なぜなら、災害時の非常用水や夜間でも飲み物が買えるというメリットがあるからだ。だからこそ、使い方を工夫する必要がある。例えば、普段は給水機を利用し、どうしても必要な時だけ自販機を使うというように、選択肢を広げることが大切だと私は思う。

「自販機大国」から「給水スポット大国」へ。これはただの言葉遊びではなく、日本が進むべき一つの未来のかたちだと私は思う。便利さばかりではなく、自分の行動が地球環

境にどのような影響を与えるかを考えることが、これからの時代には今よりもっと大切になる。私達一人一人の意識の変化が、未来の姿をつくっていく。毎日飲み物をどうやって手に入れるかという小さな選択が、やがて日本の社会に大きな変化を生むかもしれない。給水スポットが当たり前になる日が来た時、持続可能な社会が広がっていると私は信じていたい。

静かに森が呼んでいる

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 二年

小野寺 奏和

夏の空が、地球の悲鳴を映しているかのように重く感じられる。全国各地で、場所を問わず異常な暑さが続いている。気候変動は、私たちにとって身近でありながら、深刻な問題だ。そんな中でも森は静かに佇んでいる。しかし、その沈黙の中には、私たちへの問いかけが隠れている。地球の未来を守るために、今、何ができるのか。私はその声に応えたいと思っている。

環境問題に関心を持つようになったのは、小学二年生の頃だった。図書室で出会った本が、地球の美しさとそれを壊してしまう現状を分かりやすく伝えてくれた。中でも森林の役割に強く惹かれた。木々が空気を浄化し、生き物のすみかとなり、私たちの暮らしを支えていることを知り、自然の力に感動した。幼いながらも、環境悪化への危機感とそれを改善したいという使命感が芽生えた。

その思いが確かになったのは、小学六年生の全国植樹祭に参加したときだった。児童会長を務めていたこともあり、学校代表として参加した。木材を利用した製品が並び、

森林資源の可能性を実感した。そこで出会ったのが「森林サイクル」という言葉だ。森林は、植えて育て伐採して使い、また新たな木を植えるという循環によって成り立っている。この循環を適切に管理し安定させることで、森林本来の役割が高まり、二酸化炭素の吸収率も向上すると思う。これは、いわゆる「グリーンカーボンニュートラル」の達成にも繋がると考えている。木材を街づくりに活かすことで、環境にやさしい社会を築くことができる。また木のぬくもりは人の心を落ちつかせ、都市の中に自然を取り戻す力がある。森林と人々が共生し、地球を守っていく未来を、私は本気で描いている。

現在は、森林サイクルを軸に夢に繋がる気候変動対策に取り組んでいる。まず植える段階では、地域の植樹祭に積極的に参加し、自ら植樹を行っている。管理する段階は自分では実行が難しいため、林業に従事する方々のお話を聞いたり、森林散策を通して自然の美しさや生命力を感じたりしている。そして、最も身近なのが使う段階だ。木からで

きた紙を大切に使い、裏紙として再利用している。また、木材を使った製品を日常生活に取り入れている。これらは、私ができる限りの森林から始まる気候変動対策だ。

これからは、より多くの人に森林の重要性を伝えていきたい。友達や家族に話すことで関心の輪が広がっていく。将来は、森林サイクルを助け、自然あふれる街づくりに尽力したい。夢はまだ形になっていないが、地球の未来に貢献したいという思いは揺るがない。森は、黙っていても語りかけてくる。その声に耳を澄ませ、行動に移すことが必要だ。行動を起こすのに今より早いときはない。だから私は、森と共に生きる社会を目指し、美しく輝く地球を未来へ繋ぐ一歩を踏み出していく。

自然と未来をつなぐエコ名刺

静岡県 静岡市立城内中学校 三年

小原 莉緒

先日、父が仕事の取引先の方から名刺をいただいた。きました。そして「環境を考えた、面白い名刺をもらったよ」と、私に見せてくれました。その名刺は、ふつうの白い紙ではなく、少し茶色がかったざらつとした手ざわりの再生紙のようなものでした。よく見ると、名刺のすみに「みほのまづがみ」と書いてあり、何か特別な紙なのかなと思いました。

私は気になって調べてみると、それは三保松原で行われている環境保全の取り組みの一つだとわかりました。三保松原は、世界文化遺産・富士山の構成資産としても知られ、多くの観光客が訪れる景勝地です。その美しい松林を守るため、地域の高校生や大学生、企業、ボランティアの方々が力を合わせて落ち松葉を集め、それを使って「みほのまづがみ」という紙に生まれ変わらせています。

松葉は放っておくと地面をおおいつくしてしまい、松の成長や景観の維持に悪影響を与えるそうです。そこで、週に一度清掃活動が行われ、その集めた松葉を細かく砕いて、再生紙の材料として使っているという話を知り、私はとても素晴らしい活動だと思いました。こうして生まれた紙は名刺やカレンダーなどに使われ、地元の魅力を発信する道具にもなっているのです。それまで廃棄・焼却するしかなかった松葉が、香りのする紙に生まれ変わり、さらに地元の自然や文化を伝えるアイテムにするというアイデアは、新鮮だと思いました。その上、名刺を受け取った人が「これは何だろう？」と興味を持って調べることで、三保松原のことや、環境を守る活動に目を向けるきっかけにもなるのです。

今、地球の環境はさまざまな問題を抱えています。しかし、こうして地元の自然を大切に、資源として活かしていくという人たちの姿を知って、「エコって、特別なことではなくて、身近なところから始められるんだと思いました。普段は捨ててしまうような枯れ松葉が、地域の未来を守る大切な資源になる。そのような考え方が、これからの社会にはとても大事なのではないかと感じました。」

このように、自然と人との

つながりを感じる取り組みを、多くの人に知ってもらいたいと思います。そして、私もボランティア活動に積極的に参加したり、環境にやさしい製品を購入したりするなど、できることから少しずつ行動に移していきたいです。いつか自分の名刺を持つようになったときには、「みほのまづがみ」の名刺を使って、「これは私のふるさとの自然から生まれた紙なんです。」と伝えられるような人になりたいと思います。

入賞

「赤」を知らないトマトたち

東京都 学習院女子中等科 二年

竹内 あかり

祖母は八〇歳を過ぎた。私が物心がつく前から、毎年、真っ赤なトマトや鈴なりの枝豆などが箱いっぱい送られてきていたが、今年は届かなかった。「農作業が身体にこたえるようになった」という。遠く離れた祖母を身近に感じるものだっただけに、寂しかった。

私の心の隙間を埋めるように、自宅マンションのベランダで野菜を育てることにした。母が買ってきてくれたのは、トマトの苗だった。とはいえ、

昨今の記録的な猛暑。エアコンの室外機の風も相まって、むせかえるような暑さのベランダに出て、水やりをするのは根気が必要だった。その甲斐あってか、トマトの苗はぐんぐんと成長し、あつという間に一六〇センチ弱の私の身長を追い越した。ついに緑色ながら実をつけ始めた。今か今かと、実が赤く染まることを想像しながら、せわしなくベランダを覗いていた。だが、数日経っても、実が大きくなるばかりで、祖母が畑で作ったトマトのように真っ赤に熟してくれず、気づくと表面に亀裂が入りはじめた。

祖母に電話で助けを求めると、「最近猛暑日が続いているから、そのせいでうまく育たないのよ」と祖母は教えてくれた。この現象を「高温障害」と呼ぶようだ。気温の上昇でトマトが水分不足になってしまい、発育に大きな遅れをもたらす。近年、地球温暖化によって、高温障害は増える傾向にある。

人に届けることもできる。居住地の近くで作物を栽培すれば、農地が水を蓄えてくれるために、コンクリートの舗装が多くて保水力のない都市部でも、川の氾濫や洪水を防げるという利点がある。

他方で、効果的な取り組みとして、植林活動も挙げられる。森林の光合成によって二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を抑制できるだけでなく、多様な生き物を生息地となり、生態系の維持に大きく貢献することもできる。

他愛もない理由からベランダで作り始めたトマトを通して、地球温暖化の現状の一端に気づいた。身の回りで起きていることは、世界レベルで起きていることと地続きなのだ。頭と心にある気づきのセンサーの感度を上げて、日々を見つめ直そうと思う。

入賞

想像力を持った行動で未来の地球を守ろう

京都府 京都市立太秦中学校 一年

竹鼻 麻実

京エコロジーセンターで人が出すゴミの量の変化を実際に見て、数十年でかなりの量が増えていることに気づいた。

昔よりも「エコ」や「リサイクル」という言葉が一般的になり、私も水筒を持参したり、一度使った紙の裏をまた利用したりしているし、ゴミを増やさないよう意識する人が増えているのにゴミが増えたということは、それだけ昔より物の種類や数が過剰に増えてきているからだと思う。

人が生活する上でゴミの量をゼロにすることはできないから、ものを買う時からエコを意識して気をつけるべきことがあるのではないかと考えた。

母と買い物に行った時、値段や味だけじゃない選び方をしていることに気づいた。母は商品の包装についているマークや産地をよく見て選んだり、障害のある人が働く施設のクッキーやパンを買ったりしている。母に聞くと、買う側の商品の選び方で未来の環境や人への配慮に繋がると話してくれ、「エシカル消費」という言葉を教えてくれた。

「エシカル消費」とは、地域の活性化や雇用などを含む人・社会・地域・環境に配慮した消費行動だ。例えば、私の好きなチョコレートには、児童労働や不公平な賃金などの社会的問題、力才栽培のための森林破壊や農薬の使用という環境問題が背景にある。再生可能な包装がされたチョコレートはエコ活動の一部にはなるが、エシカル消費の視点では問題が含まれている場合がある。

私は環境に配慮した商品はエコ活動として必要だけれど、背景に社会的な問題が残っているのなら、地球の未来に繋がらないと思う。ものを買う時には、商品の背景に何があるか使い終わった後はどうするか、環境だけでなく人や社会にも優しいかという想像力を持った行動をすることが人と環境が共存した未来の地球を守ることになる。今後はエコ活動だけでなく、エシカル消費の視点を持った行動をとることが必要だと感じた。

これから私が取り組みたいエコ活動としては、水筒やエコバックを持つことでプラスチックの量を減らしたり、家

でゴミを捨てる時に正しい分別をすることで再生可能な資源がリサイクルできるようにしたり、また何度も使えるものを買い、また一度で廃棄する回数を減らすなどゴミを減らす活動を今後も続けていきたいと思う。それに加えて、今回学んだエシカル消費の視点を忘れずにいることも重要だ。例えば、フェアトレードやオーガニック商品などのマークを覚えて作った人や環境に優しいかを買い物の基準にする、売り上げの一部が寄付金になる商品を買うなどのように、自分の買いたい物が社会に繋がっているという想像力を持つこと、そしてその視点を身近な人に伝えて行動できる人一人でも多く増やすことが地球の未来を守る一歩となるはずだ。

入賞

遠くのペットボトルのこだま

大阪府 大阪市立北稜中学校 一年

陳 国栄

「ねえ、これって前にあな
たが飲み残したボトルじゃ
ない?」、中国に帰省してい
る姉が、ビデオ通話の途中で
ふと私に言った。画面を覗き
込むと、そこには五か月前、私
が中国の家にいた頃、部屋の
隅に置いたままのペットボト
ルが映っていた。ボトルには
すっかり埃が積もり、窓辺に
ぼつんと立っていた。その瞬
間、いつもは見過ごしていた
ことがふときになった。

このボトルは、今や何千キ
ロも離れた場所にある。私は
以前見た動画を思い出した。
たった一本のペットボトルが
自然にバラバラになるには、
四百年以上かかるという。し
かも完全には分解されず、焼
却すれば空気を汚してしま
う。人が残した痕跡は、簡単に
は消えてくれないのだ。通話
を終えた私は、窓の外を見な
がらぼんやり考えた。

以前は「環境保護なんて他
人事だ」と思っていた。どこの
学校にもよくある、あのスロ
ーガンや講演、イベント。だ
け今、私は気づいた。もしかし
たら世界を変える第一歩はこ
の小さなペットボトルなのか
もしれない。

私の一つの小さな、でも長く

続けられることを始めること
にした。名付けて「ボトル記録
帳」。捨てようと思えば捨てら
れるボトルたちは、いつ、どこ
で出会ったのか、どんな形だ
ったか、どこへ行ったのか、記
録していく。月末には「今月一
番不要だったボトル」を選び、
それが本場に必要だったのか
考えてみることにしている。
記録しやすいように、空きボ
トルで「展示壁」を作った。色
や形ごとに並べると、飾りの
ようにも見えるし、どこかで
警告を発しているようにも見
える。

壁に何枚の小さなカードを
貼った。自分へのメッセージ
だ。「もし振り返って見たくな
いなら、それを最初から生ま
れさせないこと。」私の「ボト
ルウォール」は、ただのごみ置
き場ではなく、静かな環境ア
ーカイブになってしまった。
やがて私は、飲み物を買う
前に、このボトルは取ってお
きたいと思える? そうでなけ
れば、他の方法で喉の渇きを
癒せないだろうか? そう考え
るうちに、ペットボトルを買
う回数が自然と減っていた。
壁の空いたスペースを見るた

び、小さな達成感を覚える。

私の「ボトル計画」は、まだ
終わっていない。冬休みに帰
国したとき、忘れられていた
あの一本を自分の記録帳に貼
って、その旅を終わらせてあ
げたい。

環境保護は激しい運動では
なく、静かな選択です。目立た
ない決断の一つ一つが、やがて
未来の生活の一部となるでし
ょう。しかし、すべてはあの小
さなペットボトルから始まっ
たのです。

入賞

いつまでも続け！ 青空広がる野球観戦

大阪府 大阪市立北稜中学校 一年

土井 こころ

今春、尼崎に阪神タイガ
ースの二軍施設として、ゼロカ
ーボンベースボールパークが
オープンした。深い緑を基調
とした色あいで、土のグラウ
ンド、天然芝、両翼のサイズ、
外野のふくらみに至るまで甲
子園球場をできるだけ忠実に
再現されたこだわりの新球場
である。野球観戦が大好きな
私は、待ちに待ったシーズン
の開幕という事もあり、はや
る気持ちで落ち着かせながら
球場を訪れた。大物駅から徒
歩五分程の場所にあり、広大
なスペースに木々豊かな公園
や練習場と選手寮を兼ね備
え、プレーを間近で見ることが
出来る大迫力の施設であつ
た。試合を楽しんでいた私は
ふとゼロカーボンという言葉
が気になり、イニング間にパ
ツクスクリーンをながめてい
た。すると「スタジアムからチ
ェンジ」という標語と共に環
境取り組みの紹介動画が流れ
ていた。ゼロカーボンとは、
CO₂などの温暖効果ガスの
排出量を削減、また森林によ
る吸収量を増やすことで地球
温暖化を防ぐとする取り組み
みだ。

球場では太陽光発電と蓄電

池の導入により、一年間で使
う電力の80%以上を発電し
ている。他にも省エネの徹底、
CO₂排出量のクリーンエネ
ルギーの活用、貯まった雨水
のグラウンド整備やトイレ洗
浄への活用、旧小田南公園の
樹木の一部を移植した緑豊か
な公園の実現に至るまでたく
さんのエコ取り組みを実施し
ているそうだ。

私にとって新球場での野球
観戦は、地球温暖化を抑制す
るためのエコ活動について改
めて考え直す良い機会となつ
た。一方で十二歳の私には、球
場の様な大規模な取り組み
は、一人の力で進めることは
困難であると感じ、頭を悩ま
せてしまった。そんな時ふと
母の行動に目がいきあること
に気が付いた。ある日の午後
急な激しい雨に見舞われたそ
の時、母はバケツや、たらい等
のたくさん容器をベランダ
に持ち出し雨水を貯めてい
た。また生活場所や時間に合
わせてこまめに消灯したり、
使用していない電化製品のコ
ンセントを抜くなど節電を行
っていた。他にも、界面活性剤
を使用した洗剤を使わず環境
に配慮された酵素系洗剤を使

用するなど、母は家庭内でも
たくさんのエコ取り組みを行
っている事に気が付いた。一人
一人の意識や小さな取り組み
も積み重なる事で大きな力に
なる。私は母を見習い、例え小
さくても自分に出来るエコ取
り組みを実践する事を決意し
た。入浴時にお湯の無駄使い
をやめる。遠出には電車やバ
スを利用する(一人に対し排
出されるCO₂は自家用車の
七分の一だそう)。地産地消を
心がける(輸送距離削減によ
るCO₂排出量削減)。このよ
うな私の小さなエコチャレ
ンジも、たくさんの人々の取
組みと結集する事でゼロカー
ボンへの大きな一歩となるの
だ。

十年、二十年後いや五十年
百年後にも子どもたちが美し
い青空のもと野球観戦を楽し
める未来でありますように。

入賞

未来へつなぐ自転車通学

東京都 練馬区立北町中学校 三年

富久 眞斗

私は中学三年生で、来年は自宅から少し離れた志望校に進学する予定です。その高校は、勉強にも部活動にも力を入れていて、私が将来やりたいことにつながる大切な場所です。ただ、自宅から高校までは片道で五キロ以上の距離があります。通学方法を考えたとき、最初は電車やバスを利用することも考えました。しかし、私は自分の足で通うことに挑戦したいと思い、毎朝自転車で通学することを決めました。自転車通学なら環境にも体にも優しく、私にとって最もふさわしいエコ活動になると感じたからです。

電車通学でも、車やバスのようにガソリンを使う必要がなく、二酸化炭素を排出しません。しかし私が自転車通学にこだわる理由があります。それは自転車通学が季節ごとの自然を身近に感じられることです。春には道沿いの桜並木が迎え入れてくれ、夏には朝から蝉の声を聞きながら学校へ向かうことができます。秋には落ち葉を踏みしめる音に季節の移ろいを感じ、冬には冷たい空気を切って走ること一日の始まりに気持ちが引

き締まります。自転車では味わえない景色や空気にふれることで、自然の大切さを改めて実感し、環境を守りたいという気持ちも強くなります。また、自転車をこぐことで自然と運動になり、体力づくりにもなります。特に志望校には部活動で挑戦したいこともあるので、毎日の通学が練習の一部になり、環境保護と健康づくりの両方を実現できるのです。

また、自転車通学を通じて地域の環境をきれいに保つことも貢献したいと考えています。通学路でゴミを見つけるときは拾って処理する、道路や公園がきれいだと感じたらその状態を保つために意識して行動する、そうした小さな積み重ねを続けたいです。自分の行動で地域の景色が少しでもよくなると考えると、自転車通学は移動手段を超えて、環境保全の活動に変わるのだと思います。

将来的には、自転車通学だけでなく、家族でのエコ活動にも力を入れていきたいです。具体的には、電気や水を無駄にしない生活を心がけたり、食べ残しを減らしたりす

ることです。また、高校生活では友達や後輩に、自転車通学や環境への配慮の大切さを伝えたいと思います。例えば、自転車で通う友達と一緒に「クリーン通学デー」を作り、ゴミ拾いやリサイクルの呼びかけを行うなど、小さな取り組みを広げていきたいです。

環境問題は一人で解決できるものではありません。しかし、私が毎日続ける自転車通学のような身近な行動が、確かに未来につながっていくと信じています。地球の環境を守るために大切なのは、特別な活動ではなく、毎日の生活の中でできる工夫を大事にすることです。私はこれからも、自転車通学を通して環境への意識を高め、未来の子どもたちに美しい地球を残せるよう努力していきます。私のエコ活動は、志望校へ向かう道と同じように、未来へ続く大切な道なのです。

入賞

未来の手賀沼のために、今出来ること

千葉県 我孫子市立白山中学校 一年

長野 遥貴

私の住んでいる千葉県我孫子市には、手賀沼という大きな沼があります。自然が豊かで、水辺には沢山の鳥や魚が住んでいて、私達の身近な自然として親しまれています。

しかし近年、この手賀沼では「ナガエツルノゲイトウ」という外来植物の異常繁殖が大きな問題になっています。

ナガエツルノゲイトウは、もともと日本にはいなかった外来種で、繁殖力が非常に強く、あつという間に広がってしまっています。水面を覆うように広がることで太陽の光が水中に届かなくなり、水草の光合成が出来なくなります。その結果、水中の酸素が不足し、生き物達が酸欠状態になって死んでしまうことがあります。さらに死骸が水底にたまると、分解されるときに酸素が消費され、水質がいつそう悪化する悪循環が起きます。

この問題に対して、千葉県や我孫子市も重要な環境課題として取り組んでいます。千葉県の「手賀沼水循環回復行動計画」などには外来水生植物の駆除を、地域・行政・NPOが協力して行う必要があると書かれています。行政

が本気で取り組んでいるからこそ、私たち一人ひとりの行動も重要だと感じます。

私は小学生のころから、総合学習を通して手賀沼の自然と環境問題について学んできました。四年生の時には、ナガエツルノゲイトウが繁殖している場所を見に行き、自分で写真を撮り、それが授業で資料として使われました。五年生では、手賀沼の魅力や課題を調べ、ポスターやリーフレットを作って公共施設で展示したり、ごみ拾い活動にも参加しました。

また、ジャパンバードフェスティバルの環境学会にも参加し、手賀沼の環境について発表しました。五年生では「我孫子市にある豊かな自然環境を探る」というテーマで手賀沼や谷津の自然を調査し、六年生では「我孫子の魅力アッププロジェクト」我孫子の豊かな自然を受け継ぐために私たちにできること」という演題で、手賀沼に落ち葉がたまりすぎると水質が悪化して生物に悪影響を与えることや、マイクロプラスチックによる問題を発表しました。

中学生になった今も、手賀沼の環境問題には強い関心を持ち続けています。今年六月には、NPO法人「水辺の環境を守る会」が実施しているナガエツルノゲイトウの駆除活動に初めて参加しました。実際に沼に入り、植物を手作業で取り除く作業は大変でしたが、自分の手で自然を守る事が出来たという達成感がありました。八月にも参加する予定です。

ナガエツルノゲイトウのような外来植物の問題は、地域全体で協力しなければ解決出来ません。私のような小さな活動も、積み重なれば未来の手賀沼、そして地球の自然を守る大きな力になると信じています。

入賞

おばあの口ぐせ

沖繩県 昭和薬科大学附属中学校 二年

仲村渠 愛結

私の祖母の口ぐせは「カメーカメー」と「もったいない」だ。

沖繩には「カメーカメー攻撃」という言葉がある。カメーとは食べなさいという意味で親戚などが集まる場でどんな料理をすすめる行為のことだ。

カメーカメー攻撃は食卓にたくさんの料理を並べること、相手への歓迎の気持ちを表すとても素敵な沖繩の文化であり、うちなーんちゅのおもてなしの心の象徴だと思う。

私が、祖父母の家へ行くと、決まって大きな食卓いっぱい数々の料理が並ぶ。

特に、お正月やお盆の際は、イナムドウチに中味汁、てびちやスーチカー、ゴーヤーチヤンプルーなどがずらりと並び、その様子は圧巻だ。

祖母は私が何かを食べ終わると、すぐに次の料理を持ってきて「カメーカメー」とすすめてくる。

最初は嬉しくて、夢中になつてどんどん食べ進めていくが、だんだんお腹がいっぱいになってくる。

しかし、祖母のカメーカメー

攻撃はとまらない。

そんな祖母からはいつも、もてなしたいという心と温かい愛情が感じられた。

どうしても食べ切れずに残ってしまった料理に祖母は「もったいない」と言つて小分けにして私に持たせてくれた。

余った料理を翌日も美味しく食べられるように工夫している祖母の姿を見ると、私は「もったいない」という言葉の意味を実感した。

カメーカメー攻撃は心のこもったおもてなしの一方で、食べ過ぎや食べ残しが生じやすく、食品ロスの一因にもなる。心のこもった料理を断るのは難しいが、もし残してしまえば、食材が無駄になってしまう。

現在、日本で発生する食品ロスは農林水産省によると年間約六四〇万トンにのぼり、国民一人あたりに換算すると毎日お茶碗一杯分のご飯を捨てていることになるという。

この現状を考えると、祖母の口ぐせである「もったいない」という言葉は単なる家庭でのしつけではなく、今の日本の社会全体に必要な心持ちなのだと思う。

入賞

全ての生き物へ、届け！ 私の植林計画

北海道 鹿追町立鹿追中学校 三年

西垣 美緒

地球温暖化や気候変動のよ

うな環境問題がますます深刻化している昨今、皆さんは環境問題によって大切なものを失ったことがありますか。私は、思い出の場所を失いました。

私の家の近所には大きな森林があり、私は1日の半分以上をそこで過ごすほどその森林が大好きでした。しかしある日、いつもの森林が「取り壊し作業予定」と書かれたテープで囲われているのを見つけた。その森林は、わずか一ヶ月も経たないうちに跡形もなく撤去されてしまいました。大切なものを突然失うということを、十歳の私は初めて体験しました。これ以上大切なものがなくなるのは耐えられないと、幼いながらも感じました。

そこで私は森林があった土地の持ち主のもとへ訪問し、なぜ森林を取り壊したのかと尋ねました。すると、取り壊しを行った背景には地球温暖化による気候変動の影響があったと教えてもらいました。近年、干ばつが原因の自然発火や火災が頻繁に起きており、森林を守ること自体が厳しく

なっているのだそうです。

私の家庭は農家で焼却炉も導入しているため、二酸化炭素の排出量が以前から気になっていました。それに加え、地球温暖化の影響で気温が上昇しているせいで、家畜の状態も良いとは言えなくなってきました。そこで私は、少しでもこの状況を改善しようと思いました。なので、自分の家の周りに小さな森林を作る「家族植林計画」を実行しました。七人家族なので、作業は思ったよりもスムーズに進みました。どんぐりの木やりんごの木を移植したり、みんなの好きなお花の種を買って育てました。森林の撤去、そして家族植林計画から五年が経った今、家族みんなで手を取り合

ったおかげで家族植林計画は成功し、私の家の周りは沢山の草木や花であふれています。まるで思い出の森林が息を吹き返したかのようにも思えました。

二酸化炭素や地球温暖化は、鮮明に目に見えて影響を及ぼすものではありません。だからこそ、目に見えるものよりも慎重に、かつ注意深く捉える必要があると思います。

す。地球で生きるすべての生き物のためにも、意志をもつ生き物が手と手を取り合い、助け合うことが大切ではないでしょうか。すべてを失ってから気づくのでは遅いのです。取り返しがつかなくなる前に気づき、対策を考え実行するということが、今の地球のためにも必要だと思います。誰一人関係のない人なんていません。無くなつてしまった森林は、私に地球に対する思いやり、そしてこの経験と行動力を与えてくれました。これらを今後の人生に生かすことが、森林が私にくれた最後のプレゼントだと思います。皆さんも、自然から学べるものがあるのではないのでしょうか。どうか今一度、考えてみてください。

入賞

未来へつなぐ金継ぎ

東京都 板橋区立桜川中学校 二年

服部 華乃

「金継ぎに挑戦してみたら
どうか。」

先日、私が小さかったころから使っていた食器が欠けてしまったときに母からそう言われた。私は処分するしかないと考えていたし、金継ぎが何かを知らなかった。母が金継ぎの様子がわかる動画を見せてくれた。私はその動画を見て、金継ぎに興味を持った。

金継ぎとは、割れた食器を漆でつなぎ合わせ、金で装飾する伝統的な修復方法である。しかし現代では、金継ぎにもさまざまな種類がある。私は初めての金継ぎだから、手軽にできて時間もかからないものがいいと考えた。そのため、漆を使わず金に似た粉で装飾する簡易金継ぎに挑戦した。

簡易金継ぎのやり方を説明する。私は今回欠けた食器を修復したため、パテという粘土のようなものを欠けた部分に埋めてみたらかいた。その後、塗る工程に移る。金色の粉に二種類の液体を加え、それをパテの上に塗った。

伝統的な金継ぎでは漆を使うため、もつと時間がかかる

が、今回の金継ぎは作業時間が一時間もかからなかった。簡易金継ぎのメリットは、まさに時間がかからず手軽にだれでも取りかかれるということ

ろだと思う。もちろん、デメリットもある。食器としての安全性に欠けるところなどである。また、伝統的な金継ぎは非常に美しいが、かぶれる危険があったり時間がかかったりするというデメリットもある。

私は、もつと金継ぎを多くの人に知ってもらいたいと思う。私自身も最近まで金継ぎのことを知らなかった。私以外にも、金継ぎの存在を知らない人がいるのではない。知っている人でも、その種類の多さまで知っているだろうか。伝統文化は難しいと最初から割り切らないでほしい。

もちろん、部活と勉強が忙しい学生や毎日遅くまで仕事をしている人などさまざまなライフスタイルがあることは理解している。しかし、金継ぎにもさまざまな種類があり、その中には手軽に挑戦できるものもある。忙しくて、一時間の息抜きに簡易金継ぎをやることだってできる。時間があ

る人なら、伝統的な金継ぎに挑戦してもいい。それぞれの生活にあったやり方で、割れた食器に向き合ってみよう。

そうすることで、捨てられる食器が減り、環境保護にもつながると思う。そして、自分の手で金継ぎした食器は思い入れがある食器へと生まれ変わり、ますます食器を大切にできるようなものという、いい循環が生まれる。ものを大切に扱える社会になることは、環境にやさしい社会になるために重要なことだと私は感じ

た。日本には、ものを大切にする文化、またそれを実現する技術がある。少し難しいと思われるが、少なからずについて正しく理解し、よりわかりやすく便利な形でこれからの社会につなげていくことが環境問題を解決していくためにできることだと思う。私達の手で、金継ぎを未来につなげてい

入賞

この町に息づく「ていねいな暮らし」

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校 二年

坂東 可奈子

「ていねいな暮らし。」最近この言葉を耳にする人も多いのではないでしょうか。SNSや雑誌、テレビ番組などでは、すっきり片づけられた部屋や、きれいに盛りつけられたおしゃれな料理が紹介され、憧れる人も少なくありません。しかし、私が本当にエ

コにつながる「ていねいな暮らし」を感じたのは、母を通して地域の町内会活動に触れたときでした。

ある日、母が町内会の活動に参加し、婦人部の方々が作った豚汁をごちそうになりました。野菜の皮や切れ端まで余すことなく使ったその豚汁は、とても美味しかったと感動していました。帰宅した母はその話を私に伝え、次の日から台所での工夫が少しずつ変わっていききました。にんじんや大根の皮はきんぴらに、キャベツの芯はスープにと、今までなら捨ててしまっていた部分が立派なおかずに変ったのです。私はそれを食べながら「無駄のない料理こそ本当のエコだ」と実感しています。

町内会では、公園清掃やパトロール、餅つき大会やお祭

りなど、地域を支える活動が行われています。母はその場で高齢者の方々から、私たちの住む地域の昔の話を聞かせてもらっているそうです。直接エコに結びつかない活動もありますが、人が集まり、知恵を受け継ぐ大切な機会にもなっています。

しかし、課題もあると感じています。それは、参加しているのは高齢者ばかりで、若い世代の姿はほとんどいないということです。近所の地域では、町内会そのものがなくなつたという話も聞きました。このままでは、貴重な知恵のつながりやが未来に受け継がれないのではないかと心配になります。

そこで私が提案するのは、「エコ×料理リレー」です。高齢者が作るエコ料理や保存食の工夫を若い世代に教え、若い世代はその様子をSNSや動画で発信します。昔ながらの知恵とデジタルの力を組み合わせれば、学びをより多くの人に広げることができます。さらに、その活動を発信する場として「エコ文化祭」を開くのもよいと思います。高齢者はエコ料理や保存食を披露

し、若い世代はリメイク作品やエコ活動の動画を紹介します。家庭の工夫を持ち寄り発表することで、世代を超えて学び合い、地域全体が一体となる場になり、魅力的な活動となり、参加する人も増えていくのではないかと考えます。

こうした取り組みを町全体に広げられれば、地域活動への関心が高まり、日ごろの協力が災害時の助け合いにもつながります。エコな暮らしは資源を大切にすることでなく、人と人とのつながりを生み、未来の安心を育てるもの

です。私が考える未来につながるエコ活動とは、地域の知恵を受け継ぎ、世代で協力しながら暮らしを大切にしていくことです。我が家から広がった「ていねいな暮らし」の波を、町全体に広げていきたいと思

入賞

衣類の環境問題と 受け継がれる服

兵庫県 学校法人須磨学園 須磨学園中学校 一年

藤 彩乃

私の曾祖母は洋服店で働いていました。そこは、一人一人のお客様にあわせたオーダーメイドの服を作ってお店です。そのような服は、何十年と着られ、時には受け継がれることもあります。一方で、現代はファストファッション全盛期です。流行を取り入れた低価格な衣料品は、短いサイクルで世界的に大量生産、販売されます。私も、そのような服はよく買います。しかし、それと同時に、私は母や祖母、そして時には曾祖母の服や着物を着ることもあります。それは、祖母や曾祖母が服を大切に

使っていてくれたからです。曾祖母が洋服を扱う仕事だっただけに、我が家には服を長く愛用するという文化があります。私は、これもエコ活動、SDGsの一つだと思いました。そこで私は、衣類に関する環境問題について調べてみました。

衣類に関する問題は、大きく分けて二つあります。一つは、製造過程においての問題、もう一つは、製造後の問題です。前者に関して、主にCO₂の排出、大量の水の消費、そして

後者については、製造後に排出される衣類の問題があります。国内で新規供給される衣類の量が八・九万トンに達しているという調査結果があります。そのうち約九割にあたる七・八万トンが事業者と家庭から排出されます。そこからリサイクルなどを除いた五・一万トン、つまり排出される衣類の六四・八%が廃棄処分されます。この中には製造されたものの、売れることなく、そのまま廃棄されるものもあります。また、リサイクルやリユースがあまり進んでいないことがわかります。一日に焼却・埋め立て処分される衣類は一二〇〇トン、なんとトラック一二〇台分にも上るとされています。ゴミの問題の中でも、衣類の問題が大きな割合を占めているということを改めて知り、驚きました。

母や祖母、曾祖母が服を大切に長く愛用してきたことは、環境面に資するだけでなく、文化を受け継いでいくという側面もあると感じました。私も、小さいとこに、おさがりをあげています。喜んでもらえるし、私も思い出し、服を着てもらって嬉しいです。これからの服を買う時は、本当に欲しいと思う、長く着られるような服を買うことを意識し、長く使いたいと感じました。そして、このように服を長く使う文化が、一人一人の消費者にも広がるよう、服を長く愛用する楽しみ方を身近な人に発信していきたいし、それがアパレル界全体が変わる一歩になればと思います。

入賞

ゴミの海からの挑戦

東京都 ドルトン東京学園中等部 二年

山内 南都子

私が環境問題を初めて実感したのは、昔住んでいたインドネシアで、アンチオールという海に行った時のことです。モールや観光地の近くはきれいに整備されていましたが、少し離れた海岸では、ゴミが大量に浮いていてとても汚れていました。その光景を目の当たりにし、環境問題は「人ごと」ではなく、身近で実際に起きていることだと感じました。

その後も海を中心とした環境問題に触れ、学びたい、何かしたいという思いが強まりました。そして中学一年生の時に、社会課題を解決するアイデアをアプリにするコンテストに参加しました。海洋ゴミ問題について「知るだけでなく行動すること」を目指し、私はアプリ開発に取り組みしました。

海の中のゴミの数に関するデータは調べればいくらでも出てきますが、海はとても広く、実際の状況を完全に数値化するのには難しいとされています。そこでまず、海洋ゴミ問題に対する人々の意識について調べるために、学校でアンケートを取りました。その結果、

関心を持つ人は多い一方で、実際に行動している人は少ないことがわかりました。私はこの結果を踏まえ、問題の深刻さを実感してもらい、さらに「個人がどのような解決法を取れるのか」を知ることで行動を促せるような、意識啓発型のゲームを開発しようと考えました。

アプリは日本と英語圏の中高生に向けて、海洋ゴミ問題に関連したクイズやミニゲームを入れ、学びながら行動を促すよう設計しました。例えば外に行きたいとき、喉が渇きそうだから何を持って行った方がよいか」という問いを出し、マイボトルやコンビニ

の水といった選択肢から選んでもらう問題を作りました。このような身近な問いを通じて、日常のちょっとした行動が環境に与える影響を考えるきっかけになるよう工夫しました。

開発したアプリはコンテストで発表したほか、学校の友達や先生に試作品をプレイしてもらい、フィードバックを得ました。その中で「質問が少なく繰り返しになってしまふ」「説明が足りず分かりにく

い」といった意見をいただきました。こうした指摘から、自分では気づけなかった改善点があると知り、利用者の立場に立つて設計することの大切さを学びました。

この経験を通して、環境問題は「知るだけでなく行動すること」が必要であることがわかりました。アプリを開発して発表したことで海洋ゴミ問題を周囲に伝えることができましたが、解決のためには私一人だけでなく、多くの人が小さな行動を積み重ねる必要があります。今後も日常でできる工夫を続けながら、より多くの人に行動を広められるよう取り組んでいきたいです。

入賞

私たちの暮らしの中で

長野県 山ノ内町立山ノ内中学校 三年

山口 庭来

私が住む長野県の山ノ内町は、周りが大きな山々に囲まれた自然豊かな場所です。中でも志賀高原は、四季を通じてさまざまなアクティビティが楽しめる魅力的な場所です。春にはハイキングやサイクリング、夏には登山やキャンプ、バーベキュー、カヌー、秋にはきのこの狩り、山菜狩り、そして冬にはウィンタースポーツ、温泉巡りなどが行われています。

しかし、地球温暖化の影響により、志賀高原にも様々な変化が現れています。気温の上昇によって降雪量が減り、スキーシーズンが短くなった、雪質が変わったりしています。また、高山植物の開花時期が早まり季節のバランスが崩れたり、動物の生息域が変わったりといった問題も起こっています。

こうした変化に対して、志賀高原では自然保護活動や環境教育、持続可能な観光の推進などの取り組みが進められています。そして、私が通う中学校でもESDという活動を行っており、その一環として、私を含めた一部の生徒で「中学校をイメージした香り作

り」に挑戦しています。町役場にある未来創造課と協力し、山ノ内町の未来に向けた政策立案や地域の課題を改善する課のことで、一緒に活動しています。私たちは今、森の手入れで出た枝葉をアップサイクルし、アロマオイルやアロマスプレーを作る活動をしています。

この活動は、自然の資源を無駄にせず、地域の魅力をいかしながら環境への意識を高めることができるとてもいい活動です。しかし、この活動だけではまだまだ足りないと思います、私は、「志賀高原自転車エコツアール」を提案します。枝葉を集めるために自転車を使うことで、二酸化炭素の発生をなくし、環境への負荷を減らすことができます。また、地域の自然や植物にふれながら楽しく環境保護に参加することができます。同時に私の住む地域の自然をもっと知ってもらうことが出来るため、地域の活性化や自然保護の宣伝にもなるのではないかと考えました。環境に優しいライフスタイルについて考えるきっかけになればと思っています。

こうしたエコ活動が行われ

入賞

空に出て地に落ちた蝶

広島県 広島市立三入中学校 三年

横田 梨緒

ちょうど今から一週間前の夏休み初日の七月二五日の部活帰りに、地面に紙が落ちていた。拾うと紙じゃなくて、綺麗なアゲハ蝶の死体だった。自転車に轢かれたって考えたが、その日はとても暑く熱中症で急死してしまったのでは？何故なら周りに花も無ければ影も無い。おまけに太陽はギラギラだから、なにか凄く蝶々の死に方が不思議だ。羽はピンツとしていて、潰れてもいない。標本に出来そうなくらいな状態だ。寿命では無いだろう。何故なら冬まで長生きする蝶は皆体がボロボロになっていたからだ。でも、それらとは異なっていたという事だ。草むらの中でもなく、人がつくったアスファルトの地面で死んでいた。だから私は、熱中症でアゲハ蝶が死んでしまったと考え、現在の地球は、温暖化を越し、地球沸騰化まで来ているのではないかと思つた。毎年暑い事がある前になつて次々と生命体が消えるのも、あたり前になるのだろうか。

この三年間の間に空き家は一種の施設と変わり、植物の多い土や砂の道のほとんどが

コンクリートやアスファルトに変わった。人間側としては使いやすくなったが、他の生き物にとってはどうだろうか。土が遺されているので植物は生えないし、蜜も吸えない。水分が無いから体も乾燥し、産卵する所も消え、別の所に移動しようとした生き物が何らかの事故で産卵できず一生を終えるだろう。そこで自分にできる事、自然を生かす生き物が休めるようにできないか？と考えた。自分には提案が二つある。

一つ目は、打ち水をする事だ。そうすれば、少しでも虫の休む場所になるし、地面のひび割れも防ぐことができ、防災にもなる。

二つ目は、「ミニ生き物オアシス」だ。オアシスというのは、木の枝や石などで小さな家をつくってあげる事だ。そうする事で避難してきた虫たちを歓迎して休ませる事が出来る。だから、学校にもミニ生き物オアシスを設置し、それを通して、SDGsなどについてグループで話し合い地域の人たちを集め、発表する機会をつくってみた。

そして八月一日、早速ベラン

ダに打ち水をした。すると三十分後に中ぐらいのアマガエルがすぐ近くで水にひたつていたのだ。この日だけじゃない。前は室外機のホースから水がもれだし風で冷やされてアマガエルの住み家になり2ヶ月ずっと居候していたなと思いい、どうしてあの時気づかなかったんだらうと思った。生き物にくつは無いしクーラーは無い。初めから生きにくい自然を人間がゴミを捨てて燃やして空気をよごしたりして、もつと生きづらくしている。あたり前“で終わらせて地球沸騰化に気づいていない。ずっと前から地球温暖化が環境問題ならそろそろ地球がこわれてしまう。

でも、今もこうやって作文コンクールなどを書く機会を子供に与えてくれているから、未来に希望を持って理想を語り実現寸前だ。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

